

国

語

(二〇二六年度)

《注意》

- 一 試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。
- 二 問題用紙は十四ページまであります。解答用紙は一枚です。試験開始の合図があつたら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっているかを確かめ、次に、解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号」を記入しなさい。
- 三 試験中は、試験監督かんとくの指示に従いなさい。
- 四 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為こつゐとみなすことがあります。疑われるような行動をとつてはいけません。
- 五 試験終しゅうりょう了の合図があつたら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 六 試験終了後、試験監督の指示に従い、解答用紙は裏返して置きなさい。
- 七 試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章を読み、設問に答えなさい。

君枝きみえという名のひいおばあちゃんのもとに、ヤギ・マサコという昔の友達からの手紙が、「天国宅配便」という品宅配業者によって届けられた。小学五年生の越智仁美おちひとみは病気のひいおばあちゃんに代わって手紙を読もうとしたが、見たことのない文字で書かれており、読めなかった。親友の花と絶交したばかりで相談相手のいない仁美は、手紙の解読のため、隣町に住む外国人たちを訪ねてまわる。彼らは国境や言葉の壁を越えて仁美の願いに共感し、協力してくれたが、手紙の言葉はどの国のものでもなかった。

母とひいおばあちゃんのお見舞みまいに行き、ベッドの脇わきに、お守りの青い目玉を吊つるした。思ったとおり、青い光が綺麗きれいに透すける。

結局、手紙の内容はわからなかったが、せっかくなので、ひいおばあちゃんに、手紙にくれたメッセージのひとつひとつを読み上げてみることにした。上半身をベッドに起こしたひいおばあちゃんは、内容がわかっているのか、それでも数々のメッセージに、じつと聞き入っているようだった。

「おばあちゃんの授業、思いだしちゃったな」と、しみじみと母が言う。「あのね、昔、ある実験があったらしくて。おばあちゃんも、よく自分の教え子に、このゲームをやったんだって」

ひいおばあちゃんとゲームのイメージが重ならなくて、意外な気がした。

「クラス四十人でゲームをする。まず、最初のルールね。『今から、ぜったいに話してはいけません』。そこへ、グループ分けをして、プリントでゲームのルールを配る。ゲーム自体は簡単なカードゲーム。トランプの山から一枚ずつカードを取って行って、相手の持ち札より数字が上か下かの単純なゲームなの。勝ったらポイントとして、コインがひとつもらえる」

単純なゲームだな、と仁美は思った。そんなゲーム、盛り上がるのだろうか。

「でも、そのゲームには秘密があるの。ゲームする人には知らされてないけれど、配られたルールは二種類ある。

15 「数字が上の人が勝ちです」 「数字が下の人が勝ちです」 この二種類のプリントが、ばらばらに配られてね」  
仁美は驚おどろいた。「そんなの……ゲームがめちゃくちゃになっちゃうんじゃないの？」

「そう。ゲームが成立しないから、みんな怒り出したり、しゃべったらいけないから、身振り手振りで行かんかしたり、ゲームどころじゃなくなってしまうたんだって。ルールが二種類あるからまあ、仕方がないんだけど」

20 「①なんでわざわざそんなことしたんだろう。楽しいゲームなのに、クラスの雰囲気めちゃくちゃになりそう」  
「それはもうaケンアクになったらしいよ。アンケートでも、ルールを守らない人がいて、勝手な主張をして、みんな気分は最悪だったって。終わった後も、みんなむっつりと黙って」

それはそうだろう。自分が勝ちと思っているのに、相手がひよいとポイントを取ろうとしたら、ズルをするなと誰だつて怒る。でも向こうだつて、別のルールがあるとしたら？

25 「それでね。ようやく種明かしよ。ルールが二種類あったことをね。それで、おばあちゃんはこう言っただって。『みなさん、さっきのゲーム、大変、雰囲気が悪くなりましたね。実際に、喧嘩になりそうなグループもありました。でもどうでしょう。もしも、話してはいけないというルールがなかったなら』」

仁美は考える。「うーん。それなら、お互いに配られたルールの内容を説明して、ルールがふたつあることがわかったんじゃないかな。喧嘩にはならなかったし、雰囲気もきつと悪くならなかった」

30 「そうなのよ。それこそが——」  
「語学です」

その声は、ベッドの方からはつきりと聞こえた。ひいおばあちゃんが、こちらをまっすぐに見ていた。その目には力があつた。

35 最近は、いつも病室で眠っていたようなひいおばあちゃんだったが、なんだか、急にしゃんとしたように見える。教壇に立っていたという、あのころのように。「おばあちゃん！」「ひいおばあちゃん！」と母とふたりで何か言おうとしたけれど、言いたいことが一度にありすぎて、うろたえて喉につつかえるみたいになって、「おばあちゃん！」とただ繰り返すだけだった。でも、まばたき一回するたびに、ひいおばあちゃんは、だんだんまた夢の世界に戻っていくみたいだった。

「ひいおばあちゃん、戻ってきてよ！」

40 思わず右手をぎゅつと握った。母も左手を強く握む。ふたりでひいおばあちゃんを記憶の底から引っ張り上げようとでもしているように。

なんとか必死で意識をつなぎとめようとして、「ひいおばあちゃん！」と叫んだ。ひいおばあちゃんが何か言

う。

……たいね……

何て言った？ ひいおばあちゃんは今何て言った？

母と目を見合わせる。

「今の。たぶん、〃会いたいね〃って」

そのまま急に眠くなったのか、ひいおばあちゃんは眠ってしまった。

会いたいねえ——

ひいおばあちゃんは、②誰に会いたいと願ったのだろう。

50 その日は朝から、仁美は机に、便箋を丸めた山を作っていた。慣れていないから、うまく手紙を書くのは難しい。

55 結局、手紙の内容はわからずじまいだったけれども、③メッセージ解説に協力してくれたみなさんに、お礼の手紙を渡すことにしたのだった。

へメッセージをくださったみなさん、ありがとうございます。手紙の内容は結局わかりませんでした。みなさんが、ひいおばあちゃんにメッセージをくれたこと、忘れません。わたしは将来、言葉をたくさん勉強して、みなさんに直接お礼が言えるよう頑張ります。ありがとうございます。越智仁美

学校に行くと、夏休みでも職員室にいた先生に相談し、ALTの先生にも手伝ってもらって、英語でも書いてみた。

60 最初は、外国人がいっぱいいるアパートに近づくのもなんだか怖かった。言葉も姿も文化もぜんぜん違うけれど、話してみれば、みんなひいおばあちゃんのことを気遣ってくれた。もつと世界のいろいろなことを知りたいと思つたし、いろんな人と接してみたくなった。この願末は、夏休みの自由研究、「ひいおばあちゃんへの手紙」にまとめた。

※2 フォンのところへも、手紙と、お礼のお菓子を届けに行った。「シンチャオ！ カムオンバンランクイ」

65 あの日行ったコースをひとつずつ回って、お礼をしていく。まずはスパイス屋。「アップコットダンニヤワード」次は八百屋へ。「トウリマカシ、フロントウキヤンタラアツヘルカリー」ケバブ屋へ。「メルハバ、ソんケツ

70 そんな折、ちようどヤギから「④祖母たちのことを調べていて、わかったことがあります。物置の小箱から、日記が出てきました」と連絡が来た。

よかつたら直接、顔を見て話しませんか、ということになり、母にパソコンのウェブ会議システムをつなげてもらった。

75 ヤギはアメリカ生まれの四世だそう。母より少し年上のようだった。眉も目もすつとしていて、見た目自体は、町内のすぐそばに住んでいそうな日本人のように見えるが、表情や手の動きとかは、ALTの先生と同じく、どこことなく、アメリカの人なんだという感じがする。学生時代に、祖母の国である日本に長く留学していたこともあって、ヤギの日本語はとても流暢だった。仁美も母と並んで、モニターに映るようになる。こちらはお昼前だが、向こうは夜の八時ほどらしく、部屋には電気がついていて、地球って本当に広いなだと妙なことにbカンシンする。

80 ヤギの部屋で、白猫が「なーん」と鳴いてカメラを横切ったので、ひとしきり、可愛い猫ちゃんですわねという話で盛り上がる。猫の名はオモチというらしい。由来はヤギの好物の、日本の餅だそう。

ヤギは「祖母の遺品の中から、日記と、他にも暗号の手紙が出てきました」と言う。説明によると、暗号の手紙は一通だけではなく、どうやらふたりは、数回にわたって、この暗号でやりとりをしていたらしい。

「日記を読んで、正確な日付がわかったのですが、暗号の手紙のやりとりをしていたのは、Japanese Internment  
85 中でのことだったようです」ヤギは、日本語は流暢だが、たまに日本語が出てこない言い回しがあると、そこだけ英語に切り替わる。

「えっ？ ジャパニーズ・インチャーメンツ？ っていう名前の学校だったんですか」いっこうに事情がわからず、仁美が訊いた。小学校の名前だろうか。

母が「そういえば、聞いたことがあります。Japanese Internment——は、〃日系人強制収容所〃ですよ。アメリカに住んでいた日系人が、戦争のときに、強制的にそこに入れられたという……」と、口をはさんだ。母の声

90 が、いつになく硬い。  
ヤギも言う。「そうです。わたしも祖母からは、直接聞いたことはありません。戦時中のことは、何も語りた

がらなかったもので……」

強制収容所？

『アンネの日記』で読んだことがあるけど、あれはユダヤの人が捕まえられたんだっけ？

95 　　なんで日本人が？

　　なんでひいおばあちゃんが？

　　ヤギの調べによると、祖母の日記に貼ってあった遺品の手紙は、日付により、一九四三年を最後に、途絶えていたことがわかった。

100 　　ヤギが、日記をこちらに向けて見せてくれた。手紙が貼りつけてある。やはり、同じように、あの読めない暗号で書かれていた。

　　日記には、その他にも、たどたどしい文字で、お兄さまが兵隊に行ったというようなことが書いてあった。

　　日記によると、一九四三年に、君枝の一家はツールレイク収容所というところへ移動して、マサコの一家とは離れ離れになったらしい。戦争が終わった後に、君枝の一家は日本に帰り、ヤギの祖母であるマサコは、そのままアメリカに残って、日系人の二世として暮らしたことがわかる。

105 　　「でも、強制収容所って、もしかして、日本語は禁止だったんですか」仁美が訊く。

　　「いえ。強制収容所の中では、学校もありましたし、日本語は禁止されていませんでした」

　　「じゃあ、なぜ、ふたりは日本語じゃなくて、わざわざ、そんな暗号で手紙を送っていたんでしょう……」「それは……」ヤギは、どう説明したものかと、言いよどんでいるようだった。「時代が時代でしたから……難しいことだったんだと思います」

110 　　ヤギが、何か参考になればと言って、かつてのマサコの日記と、そこに貼られていた、ひいおばあちゃんが送ったらしき手紙とを、すべてスキャンして、データで送ってくれることになった。

115 　　ウェブ会議システムでの通話が終わった後も、「⑤時代が時代って、どういうことなんだろう……」と仁美は腑に落ちない思いでいた。

　　なんで、ひいおばあちゃんとマサコは、日本語は禁じられていないのに、手紙をあえて暗号で送りあう必要があったんだろう。ただの遊びだったのだろうか？　でもそれなら、大事な最後の手紙まで、暗号で送るとは考え

にくい。

120 それに、友達のマサコは、なんで、今ごろになって、アメリカから手紙を送ろうと思ったのだろう。アメリカと日本は遠いけれど、もし捜そうと思えば、生きている間に手紙をやりとりすることだって、充分できたかもしれないのに。

この手紙には、本当に、何が書かれているのだろう。

ずっと手紙のことを考えていたからか、⑥ふと、手紙か……と思い当たった。

125 仁美は、夏休み前に、もう絶交だと言った花のことを思い出していた。言葉ではうまく言えなくても、手紙なら、ちゃんと見えそうな気がする。

〈花ちゃん。あのときは、ごめんね〉

このまま黙っていたら、自分の思っていることも、相手の考えていることも何も伝わらない。昔、ひいおばあちゃんがクラスでやった、「ルールの違うゲーム」みたいに、人それぞれに細かいルールはある。わたしたちは同じ言葉話す。自分の思っていることを話して、相手の感じていることも聞いて、それでもまだ絶交ならば、仕方がない——と腹をくくった。

130 あれだけ親しく行き来していた花の家に行くのが、ちよつと辛かった。呼び鈴を鳴らさずに、郵便受けの所にそつと手紙を入れると、逃げるみたいにして帰ってきた。

すると、次の日。

「仁美、花ちゃんが来てるよ」と母が言う。慌てて出ていくと、花が、ちよつと目をそらしてから、「ごめんね、あのとき」と一気に言った。昨日、仁美が出したような、小さな手紙を、花も手にしている。

135 結局どちらも「ごめんね」ということになって、⑦ふたりともちよつと涙が出た。その日は一緒に遊んだ。久しぶりに遊ぶと、ひとりのゲームより数倍楽しい。

A家に帰ってから、マサコからの謎の手紙の隣に、花からの手紙を飾った。その手紙は、折り紙のようなフクザツな折り方で、星の形に折られていた。B手紙を出して、返事が来るのは、本当に嬉しいことなんだなとしみじみ思う。

140 ひいおばあちゃんとマサコは、どんな気持ちで、暗号の手紙を交換していたのだろう。何かとても、伝えたいことがあったに違いないのだ。

わかりたいけれど、それを解く鍵はどこにもない。

145 夕食が終わった後、母親が切り出ししてきた。大事なことを話すときの常で、綺麗にテーブルの上を掃除して、一対一でまっすぐに座る。

「おばあちゃんとお友達のマサコさんが、暗号で手紙をやりとりした件のことだけど。わかったかもしれない」  
母親は、送ってくれたマサコの記事と、強制収容所に関する本をいろいろ読みこんで、説明してくれた。ヤギが言っていた、「一九四三年に、ひいおばあちゃんがツールレイク収容所に移った」という事実から、あることがわかってきたのだという。

150 「一九四一年に、日本がハワイで真珠湾攻撃を始めて、戦争が始まったのね。当時アメリカに住んでいた日系人は、住んでいた家や土地から、強制的に立ち退かなくてはならなくなったの。アメリカに住んでいた日本人も、日本人移民も、日系人も、みんな敵性外国人として強制収容所に入れられることになった」

155 ひいおばあちゃんたちの辿ってきた歴史に、心臓がギュツとなる。まるで、刑務所に入れられる犯罪者みたいだ。なんの罪もない人たちなのに。自分の家や、苦勞して管理していた店や畑を全部置いていかなければならぬいなんて。

一度、仁美の家も、水害に襲われるかもしれないということ、避難勧告が出て、学校に避難したことがあった。あのときは幸い、それほど大きな被害もなく、次の日には家に帰れたけれど、もう二度と、住み慣れた家に帰れないかもしれない、大事な家がめちゃくちゃになっていくかもしれないと思いつつ暮らす収容所の生活は、どれほど辛いだろう。

160 何も話さなかったけれど、ひいおばあちゃんも、マサコもそんな経験をしてきたのだ。  
でも、今もし、どこかと戦争が始まって、その相手の国の人と仲良くできるかと考えると、仁美だって自信がない。知らなければなおさらだ。怖い、と思うかもしれない。

165 「⑧その強制収容所の中でも、それぞれ違う考えの人が出てきたのね。アメリカに暮らしていても、自分はやはり日本人だ、アメリカ人じゃないんだという人たちと、いや自分はまだアメリカ市民なんだ、アメリカに忠誠を誓うという人たちとで、考えが分かれたらしいの」

「え。なんで……。先祖とかを辿っていけば、みんな同じ日本人なの？」

「そういう時代だったんだろうと思う。マサコさんの日記にも、お兄さんが兵隊に行ったことが書いてあったでしよ」

「兵隊って……」

170 母は、真面目な顔で言った。「アメリカ軍として行ったの」

なんてことだろう。ひいおばあちゃんを、自分のこととしてたどってみれば、自分の仲良しの友だちのお兄さんが、自分の国と、故郷と戦うかもしれないということだ。例えばそれが、花ちゃんのお兄さんだったとしたら？

「なんでそんなことに……だって同じ日系人なんですよ、どうして」

175 「強制収容所に入れられたのは、たしかに同じ日系人だけど、例えば、もし仁美だって、もう日本に帰るつもりがなくて、日本には家もなくて、親戚もいなくて、これからはもう、アメリカで頑張って住んでいこうと、ずっと前から決心していたのだったら、どうする？ アメリカで生まれて、日本に一度も行ったことがなかったら？ もうアメリカ以外に住むところがなかったら？」

仁美は考え込む。

180 「そのとき、日本とアメリカ、どっちの味方をするとしても、どちらも間違いない。人にはいろんな立場があるから。でも、収容所の中の人たちは、だんだん、考えの違う人たちでお互いを否定し合ったり、敵視し合うようになった。ひいおばあちゃんたちの収容所でもそう。考えによって分けられて、あるグループは、ツールレイク収容所に移動しなければならなくなった。確かなのは、ひいおばあちゃんの家と、マサコさんの家は、考えが違ったということ」

「なんだかやるせない。」

185 隣に住んで、姉妹のように育ってきたふたりだった。

⑨ ひいおばあちゃんが、あのルールの違うゲームを、わざわざガラスでやった気持ちだが、今になってようやくわかるような気がした。配られたルールはどちらも正解だった。そこに正義も悪もない。

戦争が終わったんだったら、ふたりともSNSとか使って、連絡を取り合えたらよかったのになあ、今ならパソコンもあるから、顔を見ながら話せるんだし、などと軽く思っていた。そんな風に、簡単にはいかなかったのだろう。

ヤギが説明をためらったのもわかった気がした。平和な時代ならば、ずっと隣に住んで、助け合って暮らして

いたはずの、ひいおばあちゃんの家と、マサコの家は、戦争によって、距離<sup>きより</sup>だけでなく、心まで離れ離れになってしまったのかもしれない。

そんな中、どんな気持ちで、ひいおばあちゃんとマサコは、暗号の手紙を送り続けたのだろうか。

仁美は朝起きて、ふと、机の上の、このまえ伸直<sup>ちんちき</sup>した花がくれた手紙に目を留めた。C 伸直<sup>ちんちき</sup>の記念<sup>きねん</sup>に飾<sup>かざ</sup>つておいたのだ。

星の形に綺麗にひだをつけてあり、表面に、折られたひらがなの一部分だけが見えていた。何か記憶にひっかかる。

折られたひらがなのこの形、何かに似ている。なんだか、どこかで見たような……？

ふと、あの暗号の手紙の字に似ているんだと気づいた。

急いで、マサコの謎の手紙を広げる。

これ、もしかして、やつぱり、ひらがな？

くずし字のように裝飾<sup>そうじゆく</sup>的<sup>てき</sup>にながってはいるものの、ひらがなのななめ上半分のようにも読めなくもない。仁美はメモ帳に一枚ずつ「あ」から「ん」までを書いて、そのメモを斜<sup>なな</sup>めに三角に折り、その三角の直角を上に向ける。すると、手紙の暗号とよく似たdモヨウが現れる。これを続け字で書いていけば、たぶん手紙の暗号のような文字になる。

仁美は、手紙と折ったひらがなをひとつひとつ照らし合わせ、そのひらがなをノートに書きだしてみた。もよだのんうんき？

意味をなさない言葉なのがわかって、一度諦<sup>あきら</sup>めかけたが、今度は全体を、縦に読んでみることにした。

きみえちや

んありがと

うきのぶら

のりにまたね

だいすきだよ  
つとよ  
もだちまさこ

—きみえちゃん ありがとう きのぶらんこに またのりたいね だいすきだよ ずっとともだち まさこ

⑩身体がガクガクする。

ヤギがくれたデータのうち、ひいおばあちゃんが出したとされる最後の手紙を広げる。  
同じように解読してみる。

—わたしたち どんながあつても ずっと ともだちよね きみえ—

やっとわかった。天国宅配便でやってきた手紙は、ひいおばあちゃんの問題に対する、答えだったんだ。

—わたしたち どんながあつても ずっと ともだちよね 君枝—  
—君枝ちゃん ありがとう 木のブランコに また乗りたいね 大好きだよ ずっとともだち マサコ—

大急ぎで外出中の母に電話した。あまりに声が切羽詰まっていたため、何か事故でも起こしたかと思われて、母が「大丈夫なの！ 仁美、落ち着いて！」と言う。手紙のメッセージが解読できたことを伝えると、「わかった、すぐ帰るから」と言う。

字の形や、読む向きを説明した。母が、「そうか、一九四三年には、おばあちゃんが八歳だったということは、マサコさんも同じくらいの年齢だから、ひらがなの暗号なら、ふたりで、辞書を使わずにやりとりできる」とつぶやいた。

「病院に行きましょ、準備して」と母が言うので、急いで仁美も準備した。母の運転する車に乗り込む。ひいおばあちゃんに早く伝えないと。

仁美は手紙を胸に抱きしめる。

どんな理由があつたのかはわからないけれど、日系人収容所の中で、マサコは、この最後の手紙を、結局出せずにいたのだろう。

245 　そして、それを生涯しょうがい、ずっと心残りにしていたのだろう。命が尽つきようとするそのときまで。

「ずっとともだち」という、そんな一言さえも、伝えることが難しかった時代を思う。もしも戦争がなかったら、ふたりはずっといい友達でいられたかもしれないのに――

病院に着くと、ほとんど走るようにしてエレベーターへ向かう。手には封筒ふうとうを握りしめて。

250 　この手紙は、長い時を経て、日本にやってきた。

天国宅配便のお姉さんから、ひ孫である自分の手にわたり、フォンが手紙を受け取って、みんなに呼び掛けた。ベトナムの人たちの親切で英文が書き足され、インドの人たちにもみんなで読んでもらった。インドネシアの大学生の手を経て、トルコのお兄さん、それから大学の先生へ。ひとりひとりのメッセージが書き足されながら、いろんな国の人の手に渡った。目の色も髪かみの色も、習慣も歴史も祈りの言葉も、ぜんぜん違う人たちかもしれないけれど、ただひとつ同じだったのは、この人生最後の手紙をどうか、ひいおばあちゃんに届けたいという思いだ。

病室に入るなり、叫んだ。「ひいおばあちゃん！　マサコさんから！　手紙が来たよ！　返事が来たんだよ！」

①七十八年前の返事が今、自分の手の中にある。  
（終ひいともサナカ「七十八年目の手紙」〔天国からの宅配便　あの人からの贈り物おくりもの〕所収）より）

〈語注〉

※1 A L T : アシスタント・ランゲージ・ティーチャーの略称。外国語の授業を補助する教員。

※2 フォン : 手紙の解読に協力してくれたベトナム人。また、スパイス屋、八百屋、ケバブ屋ではそれぞれ異なる国の人々が働いていた。

※3 ヤギ : ヤギ・マサコの娘。天国宅配便にマサコの手紙の配達を依頼した人物。

※4 アンネの日記 : 第二次世界大戦中、迫害されていたユダヤ人の少女アンネ・フランクが残した記録。

※5 スキャン : 文字や画像をデータに変換すること。

※6 SNS : ソーシャル・ネットワークワーキング・サービスの略称。インターネット上で、人々が交流するためのサービスのこと。

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線① 「なんでわざわざそんなことしたんだろう」(19行目)とありますが、「そんなこと」とはどのようなことですか。説明しなさい。

二 線② 「誰に会いたいと願ったのだろう」(49行目)とありますが、ひいおばあちゃんが「会いたいと願った」のは誰ですか。ひいおばあちゃんとの関係がわかるように答えなさい。

三 線③ 「メッセージ解読に協力してくれたみなさんに、お礼の手紙を渡すことにした」(53～54行目)とありますが、「みなさん」に対する仁美の感じ方や振る舞い(舞い)はどのように変化しましたか。それが具体的に示された段落の最初の五字をぬき出して答えなさい。

四 線④ 「祖母たちのことを調べていて、わかったことがあります。物置の小箱から、日記が出てきました」(69～70行目)とありますが、どのようなことがわかったのですか。説明しなさい。

五 線⑤ 「時代が時代って、どういうことなんだろう……」(113行目)とありますが、ヤギとの通話を経て、仁美の興味はどのように広がりましたか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア これまでは外国人労働者の苦勞が気になっていたが、戦時中の日系人についても想像し始めている。

イ これまでは君枝の過去が気になっていたが、日米両国の歴史についても調べたいと思いはじめている。

ウ これまでは手紙の伝達経路が気になっていたが、通信手段の変化についても興味を持ち始めている。

エ これまでは手紙の内容自体が気になっていたが、暗号を使った背景についても気になり始めている。

六 線⑥ 「ふと、手紙か……と思いが当たった」(122行目)とありますが、このあと仁美はどのような期待をこめて手紙を書いたのですか。説明しなさい。

七 線⑦ 「ふたりともちよっと涙が出た」(135行目)とありますが、このときの「ふたり」が感じていたのはどのような気持ちですか。説明しなさい。

八 線⑧ 「その強制収容所の中でも、それぞれ違う考えの人が出てきた」(163行目)とありますが、「その強制収容所の中」で「違う考えの人が出てきた」とはどういうことですか。「ひいおばあちゃんの家」と「マサコさんの家」の考えに触れながら説明しなさい。

九 ———線⑨「ひいおばあちゃん、あのルールの違うゲームを、わざわざクラスでやった気持ち」(186行目)

とありますが、どのような気持ちですか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア ともに強制収容所を生き延びたのに、マサコと絶交してしまった過去の経験が悔やまれて、子どもたちまでもが分断されてしまう戦争の悲惨さを後世に語り継いでいこうと決意する気持ち。

イ 誰も間違っていないのに、立場の異なる者同士が敵と味方に分断されてしまう時代の苦しみを知っているので、子どもたちには対話ができることの素晴らしさを知ってほしいという気持ち。

ウ かくたく友情を誓いあったのに、国家の方針に左右されて親友と憎しみあってしまった過去の辛さを忘れられず、子どもたちにはそのような苦しい体験を繰り返してほしくないという気持ち。

エ 同じ日本に関わる家系であるのに、親の考え方の違いから敵視しあうようになってしまったが、先入観を持たない子ども同士なら本当の思いを伝えあえることを若い世代に教えたいという気持ち。

十 ———線⑩「身体がガクガクと解読してみる」(223～225行目)とありますが、このとき仁美の「身体がガクガク」したのはなぜですか。~~~~線A「家に帰ってからは、マサコからの謎の手紙の隣に、花からの手紙を飾った」(137行目)、~~~~線C「仲直りの記念に飾っておいたのだ」(196～197行目)に注目して説明しなさい。

十一 ———線⑪「七十八年前の返事が今、自分の手の中にある」(258行目)について、以下の問いに答えなさい。  
(1) 「七十八年前の返事」とありますが、この「返事」がそれまで届かなかったのはなぜですか。その事情がわかるように説明しなさい。

(2) 「七十八年前の返事が今、自分の手の中にある」と感じているときの仁美の気持ちはどのようなものですか。~~~~線B「手紙を出して、返事が来るのは、本当に嬉しいことなんだなとしみじみ思う」(138～139行目)に注目し、本文全体をふまえて一四〇字以内で説明しなさい。

十二 ———線a「ケンアク」(20行目)、b「カンシン」(78行目)、c「フクザツ」(138行目)、d「モヨウ」(206行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

〈問題はここで終わりです〉

受験番号	
氏名	

(2026年度)

九

八

七

六

五

四

三

二

一

国語解答用紙

十二

a
b
c
d

(2)
